

1990年代に入って頭角を現してきたギタリストのひとりがピーター・バーンスタイン（1967年9月3日ニューヨーク州生まれ）だ。伝統的なジャズ・ギターのスタイルをマスターした上で、斬新なハーモニーや、以前だったらジャズのフレーズにならないような音の選び方を平気で使ってしまう彼には何度も驚かされたことがある。

一部で注目を集めるようになったのが、最初のリーダー作『Somethin's Burnin』をオランダのクリス・クロスから発表した1992年のことだ。この時点では、まだ熱心なファンに知られるだけの存在だった。1994年にはラリー・ゴールディングスのトリオに参加し、次いで1996年にジョシュア・レッドマンのクインテットに抜擢されて、このあたりから広く一般のファンにも知られるようになった。リーダー作は、これまでにクリス・クロスから5枚がリリースされている。参考までに、それらをリストアップしておこう。

『Somethin's Burnin』(1992年)

『Signs Of Life』(1995年)

『Brain Dance』(1997年)

『Earth Tones』(1998年)

『Heart's Content』(2003年)

そのほか、今年（2003年）はニューヨーク在住の日本人ギタリスト、井上智と組んだデュオ・アルバム『ギターズ・アローン』(ホワッツ・ニュー)が10月に発売されている。そしてここに、単独のリーダー作としては初めての国内盤となる『ストレンジャー・イン・パラダイス』がヴィーナスから登場することになった。

そのほかのメンバーも簡単に紹介しておこう。ブラッド・メルドーは、いまやジャズ・ピアニストとしてもっとも創造的な活動を繰り返しているひとりだ。それだけに、彼の参加がこのアルバムの意義を高めたことは言うまでもない。

メルドーは1970年にフロリダ州で生まれ、4歳のときからピアノに興味を持ち始めた。6歳で正式なレッスンを開始し、高校はコネティカット州ハートフォードのホール・ハイ・スクールに通う。彼がバンド活動を始めたのはこのときからだ。そしてこの間に、メルドーはパークリー音楽大学が主催するハイ・スクール・コンペティションでベスト・オール・アラウンド・ミュージシャン賞を獲得したのだった。

次いでメルドーはマンハッタンのニュー・スクールに進学し、ジャズ&コンテンポラリー・ミュージックのクラスを専攻する。クリストファー・ホリデイ、ジェシー・デヴィスらとの共演を経て、ジョシュア・レッドマン・カルテットに抜擢されて、彼の『ムード・スイング』(WB)に起用されたのが1994年のことだ。

これがきっかけとなって、メルドーはジョシュアが所属するワーナーと1995年に契約を結ぶ。そしてこの年に独立を果たして初リーダー作の『イントロデューシング・ブラッド・メルドー』を発表し、以来ジャズ・ピアノの最前線に位置する活動を継続してきた。

そのメルドーのトリオでレギュラー・ベーシストの座を守っているのがラリー・グレナディアだ。1966年2月6日にカリフォルニア州のサンフランシスコで生まれた彼は、10歳でトランペット、11歳でエレクトリック・ベース、13歳でアコースティック・ベースを手に入れている。

プロ入りしたのはスタンフォード大学を卒業してからで、その後はチャールス・マクファーソン、ジョー・ヘンダーソン、スタン・ゲッツ、ゲイリー・パートン、ジョシュア・レッドマン、ベティ・カーターなどと共演してきた。そして1995年に発表されたメルドーの1作目から現在まで、彼のトリオでレギュラーを務めている。

メンバーの中でもっとも豊富なキャリアを誇っているのがドラマーのビル・スチュワートだ。1966年10月18日にアイオワ州デス・モインズで生まれた彼は、ニュージャージのウェイン大学でルーファス・リードやハロルド・メイバーン他に師事し、在学中にジョー・ロヴァーノと出会う幸運に恵まれた。

それを機にスチュワートはプロ入りし、1990年にロヴァーノの推薦でジョン・スコフィールドのグループに抜擢されたことで注目を浴びる。この年には、初リーダー作の『シンク・ピフォア・ユー・シンク』(ジャズ・シティ)を録音し、1995年にはブルーノートと契約してアル

Stranger In Paradise <p>ストレンジャー・イン・パラダイス</p> Peter Bernstein + 3 <p>ピーター・バーンスタイン+3</p> <ol style="list-style-type: none">ヴィーナス・ブルース <p>Venus Blues (P. Bernstein) (7:14)</p> ストレンジャー・イン・パラダイス <p>Stranger In Paradise (Forest, Wright) (6:46)</p> ルイーザ <p>Luiza (A. C. Jobim) (6:19)</p> ハウ・リトル・ウィ・ノウ <p>How Little We Know (P. Springer) (5:59)</p> ボブルヘッド <p>Bobblehead (P. Bernstein) (5:58)</p> ジャスト・ア・ソウト <p>Just A Thought (P. Bernstein) (8:37)</p> ジス・イズ・オールウェイズ <p>This Is Always (H. Warren) (6:25)</p> ソウル・スターリン <p>Soul Stirrin (Gonzales) (5:35)</p> ザット・サンデイ・ザット・サマー <p>That Sunday, That Summer (Sherman, Weiss) (6:29)</p> オートム・ノクターン <p>Autumn Nocturne (Myro) (6:19)</p>
ピーター・バーンスタイン Peter Bernstein (guitar) ブラッド・メルドー Brad Mehldau (piano) ラリー・グレナディア Larry Grenadier (bass) ビル・スチュワート Bill Stewart (drums)
録音：2003年8月24、25日 <i>アヴァター・スタジオ</i> , ニューヨーク
©© 2004 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.
 <p style="text-align:center">★</p>
<p>PProduced by Tetsuo Hara and Todd Barkan. Recorded at Avatar Studio in New York on August 24and 25 , 2003. Engineered by James Faber. Technical Coordinator by Derek Kwan. Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound : Shuji Kitamura and Tetsuo Hara. Brad Mehldau Appears Courtesy of Warner Bros. Larry Grenadier Appears Courtesy of Savoy Records. Cover Art: "Where Are We Going?" by Paul Gauguin. Cover Photo : (C)Alexander Burkatowski / Corbis Japan. Artist Photos : John Abbott. Designed by Taz..</p>

バムを発表している。最近ではビル・チャーラップのトリオでレギュラーを務めるなど、スチュワートはニューヨークのシーンにあってなくてはならないドラマーのひとりと言っている。

演奏紹介

- ヴィーナス・ブルース

本作を吹き込んだレーベル名をタイトルにした、バーンスタイン書き下ろしのオリジナル・ブルース。ミディアム・アップのテンポに乗せて演奏されるテーマ・パートから、ハード・ポイルドなギター・ソロが勢いを感じさせる。ジム・ホールのプレイをアップデイト化したようなソロは、コンテンポラリーな響きの中にもジャズの伝統を強く感じさせるものだ。それ以外にもバーンスタインは饒舌この上ない。息つく暇もないほど、矢継ぎ早にフレーズを重ねていく。しかも大胆この上ないソロは、これがブルースであったことを忘れさせてしまうほど奔放な展開を示す。その勢いをそのまま受け継いだのがメルドーだ。目下絶好調の彼だけに、ここでも見事なプレイを繰り返し広げる。豊かな発想と瞬発力を伴った展開が、これまた平凡なブルースには終わらせないプレイを生み出していく。その後は、バーンスタインとメルドーを相手にスチュワートが小節交換を繰り返し広げ、そのままエンディング・テーマへと突入する。

- ストレンジャー・イン・パラダイス

お馴染みのメロディが変奏曲のような形で登場して、次第にひとつの曲としてまとまっていく。幻想的な響きを醸し出すこのアプローチが新鮮だし、面白い。バーンスタインのプレイはモーダルな音使いを中心に、メロディの断片を用いながら、不思議なバランスの歌心も感じさせる。こんなプレイのできるところが彼の個性だ。それに比べると、メルドーのソロはもう少し具体的というか、めりはりをはっきりさせることでシンプルな表現になっている。もちろん、こちらも聴き応え満点の内容であるのはバーンスタインと同様だ。

- ルイーザ

アントニオ・カルロス・ジョピンの曲を、バーンスタインがメルドーのバックングを得て、しっとりと歌い上げる。まるで心が洗われるような清々しい表現とアプローチだ。ふたりがゆったりとテーマを演奏したあとは、ベースとドラムスが静かなボサノヴァのビートで加わってくる。ミディアム・テンポの中で、バーンスタインはテーマ・パート同様、バラード・プレイに通じるソロを展開していく。それに比

べると、メルドーのソロはリズムックな要素が強い。それだけに、両者によるコントラストが、この曲の大きな特徴だ。

- ハウ・リトル・ウィ・ノウ

ミディアム・アップのテンポで快調にギターを弾いてみせるバーンスタインが素晴らしい。普段はテクニックを誇るタイプでないものの、ここでの彼はオクターブ奏法とコード・ワークを効果的に用いるなどして、ジャズ・ギタリストとして高い能力の持ち主であることを示してみせる。続くメルドーのソロでは、シングル・ノートを用いたプレイが絶妙だ。最後はスチュワートがふたりのソロイストと小節を交換し、これまた豊かな才能の持ち主であることを披露する。

- ボブルヘッド

この作品にはバーンスタインのオリジナルが3曲収録されている。いずれも出来のよさとアイディアのスマートさで甲乙つけ難い内容だ。この曲では、シンプルなジャズ・ロック調の演奏が展開される。バーンスタインもメルドーも、気持ちよさそうに楽器を奏でていく。共に明解なフレーズを積み重ねることで、曲のよさを強調してみせる。最後に登場するグレナディアも、正調ジャズ・ロックにおける模範的なベース・ソロ聴かせてくれる。

- ジャスト・ア・ソート

バーンスタインのオリジナル。洒落たセンスを持つメロディが、ジャズ・ギターの魅力を引き出すことに繋がった。フレーズがかなり上下に動くものの、そのことをあまり感じさせないところが彼の上手さだ。伝統的なジャズ・ギターのプレイであるにもかかわらず、現代的な響きを併せ持っているところが心憎い。メルドーも、そのことを心得ているのだろう。いつもよりオーソドックスな音使いとめりはりの利いたフレーズを多用しているところが聴きものだ。そして、最後はグレナディアのベース・ソロがフィーチャーされる。メロディックなフレーズを優先させているところは、これまた先のふたりと同様だ。

演奏紹介

- ジス・イズ・オールウェイズ

今度はハリー・ウォーレンが書いたスタンダードを用いて、バーンスタインが歌心に優れたところを示す。バラードよりはテンポがやや速いが、ここでの彼はバラードに準じたプレイで、聴くものの心をしっかりと掴んでみせる。メルドーの大胆さとバーンスタインの絶妙なニュアンスの表現　相反するふたつの要素がひとつに溶け合った素晴らしいパフォーマンスだ。

- ソウル・スターリン

ブルージーな演奏もバーンスタインは得意にしてきた。そのことを、アルバムの最後で存分に聴かせてくれる。力強いタッチは、実に堂々としたものだ。ファンキーとは少し異なるものの、ここでの彼は十分にブルージーなプレイヤーぶりを発揮してみせる。もちろん、メルドーのソロも、ブルース・フィーリングが横溢するものとなった。

- ザット・サンデイ、ザット・サマー

この作品を聴いて改めて感じるのは、バーンスタインがオールマイティなギタリストであることだ。彼はどんなタイプの曲をとり上げて、いつも変わらぬ個性が表出できる。このミディアム・テンポの曲でも、伝統に根ざしたスタイルながら、現代的な斬新さも併せ持ったプレイで、独自のスタイルを示す。昨今のギタリストで、ここまで自分のプレイを存分に発揮してみせるひとは少ない。そのことはメルドーについても言える。まったくふたりはいいコンビだ。そのことも、改めて実感させてくれるのがこのトラックだ。

- オートム・ノクターン

バーンスタインは情緒を感じさせるプレイも得意だ。このトラックは、そのことを見事な形で示してみせる。穏やかなテーマを、彼が確信に満ちた指使いで演奏していく。その中で、優しさや郷愁といったものを表現しているところが見事だ。先発でソロをとるメルドーも、バーンスタインの趣旨に沿ったプレイで個性を発揮する。ゆったりとしたサウンドの中で、ゴージャスな音使いとシンプルなフレーズを巧みに使い分けるメルドーのセンスが好ましい。もちろんその後に登場するバーンスタインのソロも、落ちついた風情の立派な内容だ。

【(c) WINGS 03112066 : 小川隆夫/TAKAO OGAWA】